

[シンポジウム2]

華岡流の門人たちの痕跡から見た青洲の教え

土手健太郎

愛媛大学附属病院集中治療部

1804年10月13日、華岡青洲は、世界最初の全身麻酔下の乳がん摘出術を行った。その後、青洲は全身麻酔下に多くの手術を行い、多くの門人たちを育成したが、この全身麻酔・外科手術手技は全国的には広まらなかったとされた。近年になり、少しずつ研究が進み、門人たちの姓名・出身地に関しては、梶谷光弘の論文に詳述された。しかし、未だ実際の診療に関しての全国的な研究は見当たらなかった。

一方、これまでは、地方の情報はその地方だけでしか閲覧できない事が多かったが、最近のインターネットの発展により地方の些細な情報まで比較的簡単に得ることができるようになった。即ち、華岡流の門人たちの実際の診療に関しての情報が比較的簡単に得ることができるようになった。

そこで、我々は、西日本（中国・四国・九州）の華岡流の門人たちの痕跡がどのくらい残っているかをインターネット用いて、検索したところ、中国、四国、九州の華岡流の門人729人のうち、何らかの記載のあった門人は、それぞれ57人、38人、40人の合計135人であった。この中で、記載の内容から名医と呼んで差支えない医師は、それぞれ17人、8人、13人の合計38人で、14か所（島根の西山佐保、大森加膳、大橋仰軒、岡山の久原洪哉、難波敬哉、広島山田好謙、山口の四熊字庵、徳島の井上虎源太、愛媛の鎌田玄台、矢野周二、熊崎観齋、土佐の弘田玄又、大分の小田順亭、佐賀の井上友庵）で華岡流の麻酔下手術が行われていた。このことから華岡流は、西日本の多くの場所に伝達・継承されていたことが分かった。

また、これらの門弟たちには、いろいろな逸話が残っており、多くの医師たちはその地方で献身的に庶民たちの医療に身を費やし、そのことで名を挙げていた。名医となっても、生まれた地方を重視し、たいそうな金品を得たと記録されるものは見つからなかった。

一方、青洲の医学思想に関しての論考は極めて少ない。なぜなら、青洲自身の著書はなく、従って彼自身の医学思想を述べた著述も無いからである。また、青洲はとにかく疾病を治療すること、病人を癒すことが最優先であり、臨床の第一線の医師として存在を第一とした。その上で門人や医療人たちに彼の医学思想を主張し、青洲の標語といわれるものを発したと考えられる。特に内外合一や活物窮理はよく知られている。しかし、門弟たちが青洲のもとを去る時、多くの場合、青洲は自身の座像と漢詩（竹屋蕭然鳥雀喧・風光自適臥寒村・唯思起死回生術・何望輕裘肥馬門）を書いた掛け軸を贈った。故郷に帰った門弟たちは、この掛け軸を毎日の励みとし、臨床の第一線の医師として、とにかく疾病を治療すること、病人を癒すことを最優先とし、それぞれの地方で献身的に庶民たちの医療に身を費やしたと考えられる。この青洲と同じ生きかたこそが門弟たちの理想で、青洲の生きかたこそが門弟たちの手本であったと考えられる。

以上のことから、青洲の残した理念として内外合一や活物窮理などが有名であるが、門弟たちが身をもって残した理念としては、唯思起死回生術・何望輕裘肥馬門であったと考える。もちろん、このことは現在にも通じるものである。